ユニット２研究会　　宗派運営におけるジェンダー格差 ―改善への道を模索する―
開催日時：2021 年 6 月 9 日（水）13:30-16:30
会場：zoom
参加者人数：約 70 人

■プログラム：
司会・趣旨説明
　　亀口まか（龍谷大学ジェンダーと宗教研究センター・副センター長）
発表１　「曹洞宗教団のジェンダー」
　瀬野美佐（女性と仏教・関東ネットワーク世話人）
発表２　「「浄土宗の今」―議員となって気が付いたこと―」
　稲岡春瑛（浄土宗宗議会議員）
コメント
　川橋範子（国際日本文化研究センター客員教授）
　池田行信（浄土真宗本願寺派宗会議員）
ディスカッション

【ねらい】
　日本の伝統仏教宗派の教団運営におけるジェンダー格差について実務・実情を知る方々からお話を伺い、具体的にその現状と課題を検討する。

【報告の概要】
　コロナ禍にともなう感染防止のため、本研究会はオンラインで開催された。発表者の瀬野美佐氏と稲岡春瑛氏の報告に対し、川橋範子氏と池田行信氏がコメント。司会は、亀口まか氏。報告内容は以下の通りである。
　　瀬野氏は、曹洞宗教団におけるジェンダー問題について発表した。氏の経験から言えば、曹洞宗が最も性差別をしてきたのは、尼僧(曹洞宗の女性僧侶たち)に対してであり、そこには強固なミソジニーの感情がある。曹洞宗における尼僧史を遡れば、明治維新後、尼僧は正式に教団の一員と認められたが、尼僧は結婚した場合、僧侶を辞すべしという決定的な差別が生まれた。それでも僧侶を継続すると志す尼僧に対しては、嗣法や伝法が許されず、大きな寺の住職にもなれず、男僧との間に決定的な差別が生じていた。敗戦後に、民主主義、男女同権という新しい思想が占領軍ともに入りこみ、1952 年についに尼僧による嗣法や伝法が認められた。1972 年には、尼僧と男僧の間における位の制度上での平等が認められた。しかし、制度面での男女間差異はなくなったものの、男僧から尼僧への蔑視は、現在においても改善されていない。なぜこのような差別意識があるのかを学び、変えていかなければならない、と氏は主張する。この状況は、曹洞宗における尼僧と男僧の人数の差からも理解することができる。戦時中に 3,000 人だった曹洞宗の尼僧は、2021 年では 465 人(二等教師以上の数、内 301 名の 65%が 70 歳以上)。対して、男僧は 15,054 人(高齢者割合 32%)。現在の曹洞宗の僧侶に性差別がないというのなら、なぜここまで尼僧の数が少ないのか、高齢化が進んでいるのか。
　　次に寺族問題である。1936 年には家族を有する寺院世帯が、宗門全体の 8 割を超える。

男僧が結婚した理由の一つは、お寺の中のいわゆる家事を、奥さんにしてもらえる点。それともうひとつ重要なことが、子供を授かった場合、その子を跡継ぎに出来ること。現在曹洞宗の寺院は全国で 14,000 あるが、世襲にしなかったらこれだけの数は残ってはこなかっただろう、と氏は見解する。曹洞宗宗勢総合調査報告書 2005 年版によれば、曹洞宗寺院のうち約半数の寺で、寺収入が年に 300 万円もなく、住職や家族による外勤や事業所勤務で生活費を稼いでいる。氏の実家のように、寺収入が年に 10 万円以下の寺も、千ヶ寺くらいある。なぜ、経済的には破綻しているお寺が潰れないかというと、世襲だからであると指摘する。寺族の不安定な立場を報告し、寺院の意思決定をする責任役員会に入れるべきだと発言した。

現在の曹洞宗の仕組みは、男僧に都合の良いように出来ている。その根底には、強固なミソジニー（女性嫌悪）がある。尼僧に対しては「差別」して「蔑視」して、「疎外」している。寺族に対しては「区別」して「偏見」を抱き「抑圧」、黙らせようとしている。このような「蔑視」や「偏見」を、どうすれば解消出来るか。それは、学習によって解消出来るはずである。しかし、なかなかそれをしない。男性僧侶のほとんどが、身近な女性の話を聞こうとしない。

ジェンダーというのは決して遠いところの問題ではないし、しかし近いからよく分かっているかというとそうでもない。むしろ近いから気がつかないし、分からないこともあるはず。そうであれば、なおさら、そこで分かったような気にならないようにしなければいけない。そこから自分自身との、そして他者との対話が始まる。そして、対話というのが最も大切なことだと締めくくった。

稲岡氏は、浄土宗で約 1 万人超の教師(僧侶)がいるうちの 1 割弱を女性教師が占めながらも、全国 47 都道府県の教区町が全員男性であることや、女性教師が抱擁や葬儀を務めると「なぜ今日は(男性の)住職ではないの」と問われることもあると報告した。寺側のみならず檀信徒にも、男性が住職に望ましいとの意識がある、自分自身の中にも差別意識があるのではないかと思っていただくことが大切と述べた。その上で、宗派内の女性教師が横のつながりを持つため「ふたはたの会―浄土宗全国女性教師の会―」を 2019 年に設立したことを紹介した。

「ふたはたの会」は、現在正会員賛助会員 100 名程度の会だが、浄土宗の認証団体にはいまだなれておらず、同好会としての扱いで実績を積んでいる。全国の女性教師に参加を呼び掛けているが、「こんな会の設立を待ち望んでいた」と早速活動に参加してくださる方もいれば、「男女平等の世の中なのに、どうしてわざわざ女性に特化した組織を作る必要があるのか。そんな会を作って会に参加することで、自分のお寺が格下に見られたら困る」という意見の女性教師の方もいるという。

女性が仕事を持つということは、大変なことだと実感している。見直され始めた点もあるとは言え、家事や育児・介護はまだまだ女性の仕事とみなされている。氏自身、もし自分が男だったらこんなに悩まずに済んだだろうと思うことは多々あるという。自分の立場を思うとき、男性からは補佐的立場・半人前と軽視され、尼僧さまからは同じ女性であっても「生き方が違う」と蔑視され、同じ女性教師という立場であっても「私はお寺で生まれ育ったから、寺庭婦人から教師になった人とは違う」と見下す人もいる。それが、差別だとさえ

気が付いていないと思えるのは、そんな方ほど人種や LGBT＋に対する差別には異議を唱えて活動しておられるから。どれだけ、人は自分を人と差別したがるのか。たまたま男に生まれただけ、たまたま尼僧寺に引き取られただけ、たまたまお寺の娘に生まれただけ。本人の努力はどこにもありません。それを有難く感謝する気持ちは大切であろうが、人に比べて偉いわけではない。

浄土宗において、本当の意味で男女が平等といえるようになるには、まだまだ時間がかかるであろう。まずは、チャンスを与えられ、経験を積むことが必要である。チャンスをつかむには努力も必要。物怖じせずに発言し行動する、それが一番必要な事だと思う。

コメンテータの川橋氏からは、環境問題や社会貢献に精力的な男僧がジェンダー問題なると途端にアレルギー反応を起こす様をこれまで幾度となく見てきた。今回の瀬野氏の発表を聞くと、曹洞宗におけるジェンダー問題は深刻であることが認識できる。各教団でジェンダー平等を重点課題として取り組むべきである。全日本仏教会などが活動の中心となり、各教団をモニタリングしていく必要性があるのでないか、と発言した。次いで、池田氏からは、寺族の苦しみの背景に、世襲による後継者産出があるとすれば、代替的な仕組みの構想が必要ではないか、同様の悩みを持つ人々が宗派を超えて連帯していくことが重要でないか、とコメントした。

全体討論では、「教団内における男性の圧倒的優位な社会実情に驚く一方で、本当にジェンダー意識の強い男僧はいないのか、女性の悩みは男僧に共有されないのか」、「女性同士の連帯だけでは、男性優位の宗教界の本質は変革されないのではないか、ではいかに向き合うべきか」、「情報共有や連帯の意味でも、女性間でのネットワーク構築がまずは重要ではないか」など最後まで活発な意見交流が行われた。

（文責　ジェンダーと宗教研究センター）